

Ⅲ. ヨハネの福音書 13章1節から11節

1. 13:1~3・・・場面は過越の祭りの日の夕食（過越の食事）。当時の習慣では、過越の食事の中で、2回、「手を洗う儀式」があった。その際は、しもべが出席者たちの手を洗う。
2. 13:4~9・・・イエスが弟子たちの足を洗う
 - (1) このときの食事の席には、しもべがいなかった。
 - (2) 弟子たちの中からは、誰もその役割を申し出る者がいなかった。
 - (3) 4節 そこで、イエスがしもべの役割をした。
 - (4) 5~9節 イエスは、出席者たちの手ではなく、足を洗った。
 - (5) 6節 ペテロが質問した。「主よ、あなたが私の足を洗ってくださるのですか？」
 - (6) 7節 イエスは答えた。「わたしがしていることは、今は分からなくても、後で分かるようになります。」・・・イエスの意図は、【これは、何かの象徴的な行為である。今は理解できなくとも、先では理解できるであろう。】
 - (7) 8節 ペテロはイエスから足を洗われるのを拒んだ。ということは、ペテロは自分で洗おうとしたのであろう。するとイエスはペテロに答えた。「わたしがあなたを洗わなければ、あなたはわたしと関係ないことになります。」・・・イエスの意図は、7節からつながっている。【わたしが今、しようとしていることは、何かを象徴しているのだ。そして、それは、あなたが自分でできることではないのだ。それは、わたしがしなければならぬことなのだ。しかも、わたしがあなたを洗わなければ、あなたはわたしと関係ないことになる。】
 - (8) 9節 このように言われて、ペテロは従い、イエスに足を洗ってもらった。このとき、ペテロはイエスがそこまで言うのなら、足だけでなく、手も頭も洗ってください、と頼んだ。

3. 13:10~11・・・足を洗ったことの意味の説明

(1) 10節 水浴することと 足を洗うこと との対比

① 「**水浴した者は、全身がきよい**」・・・水浴するとは、当時のローマ社会では、公衆浴場に行くことを指す。体全体を洗うので、全身きれいになる。「**水浴した**」とは、「救いのための赦し (salvation forgiveness)」を象徴している。

② 「**足を洗う必要がある**」・・・公衆浴場から家に帰る道で足は土埃で汚れる。家に入るときには足を洗う必要がある。体はきれいなままである。

足が汚れるとは、救いを受けて全身きよくなった信者が、その後の生活の中で罪を犯すことを指している。その罪の汚れを清めることができるお方は、神である。

信者がすべきことは、気づいた罪について神の前に告白することである。

「足を洗う」とは、信者が自分の罪を神の前に告白することで与えられる赦し、すなわち「神との交わりを回復するために与えられる赦し (fellowship forgiveness)」を象徴している。

③ 赦しは、神のみわざである。

- ペテロは8節で、イエスに対して「**決して私の足をお洗いにしないでください**」と言ったが、そのことばの中には、「自分で自分の足を洗うことができます。だから自分でします」というペテロの気持ちが込められている。
- イエスは、「**わたしがあなたを洗わなければ、あなたはわたしと関係ないこととなります**」と言われた。
 - 「あなたとわたしとの関係」、これは、信者と神との関係である。
 - 「わたしが洗う」とは、神が信者の足を洗うこと。信者がここすべきことは、自分の汚れた足を神の前に差し出すこと、すなわち、自分の罪を神の前に告白することだけである。人には自分の罪をゆるし、きよめることはできない。神のみができる。
 - 信者が自分の罪を言い表したその瞬間、神がその罪と、信者が気づいていない罪のすべてとを赦し、信者を再び全身きよい者としてくださる

(2) 【まとめ】私たちは、イエスを救い主として受け入れたときに、入浴して全身きれいになった。私たちは、「救いのための赦し (salvation forgiveness)」によって完全にきれいにされたのである。しかし、信者の内側にある罪の性質により、信者は依然として罪を犯すことがある。これが、足が汚れるということである。それゆえ、信者は足を洗う必要がある。「足を洗う」ことは、「神との交わりを回復するために与えられる赦し (fellowship forgiveness)」を受けることを指している。

(3) イエスを裏切ることになるユダについて

① 12人の使徒たちのうち、ユダだけは信者ではない。イエスを信じたことがない。(ヨハネ 6:64、70~71、12:6)

② ユダは信者ではないから、「救いのための赦し (salvation forgiveness)」を受けていない。全身きよい、という状態には、ない。

③ 12人の使徒たちのうち、11人は全身きよい。しかし、ユダだけはそうではない。→ 10節「あなたがたはきよいのですが、みながそうではありません。」
11節 イエスはご自分を裏切る者を知っておられた。それで、「皆がきよいわけではない」と言われたのである。

④ ユダもイエスから足を洗ってもらったが、それは部分的な洗^いギニブトーであって、全身をきよめる洗^いギロウオーではない。救いを受け取っていないユダについては、全身がきよくないのであるから、部分的な洗^いをしても何の意味もない。

同様に、イエスを信じないで、罪の告白だけをして、何の意味もない。告白した罪についての赦しもきよめも、何も起こらない。そもそも、その人は神の子どもになっていないからである。神の子どもになっていない不信者は、神を父と呼ぶこともできない。神との関係がないから、神との交わりも、そもそも、ないのである。

よって、不信者がどんなに罪の告白をしたとしても、「神との交わりを回復するために与えられる赦し (fellowship forgiveness)」は、与えられない。

IV. コリント人への手紙第一 11章 17節から 34節

1. 11 : 17～22・・・コリントの教会における二つの問題
 - (1) 分裂や分派 (17～19)
 - (2) 食べ物や持ち物を分け合わないこと (20～22)
 - ① 信者の中で、ある者たちは豊かであり、ある者たちはそうでないという状況は必ずある。
 - ② しかし、コリントの教会では、全く食べる物がなくて困っている信者がいたのに、持っている者たちが進んで分けようとはしなかった。その背景には、分派・分裂があったかもしれない。
 - ③ そのため、教会の集まりのときには、ある者たちは満腹であるが、ある者たちは空腹でのもも渴いているという状態であった。
 - ④ そのような中で、主の晩餐（聖餐式）についても、本来の目的が忘れられ、ただの飲食の場となって、信者たちが我先に食べる、ぶどう酒も飲みすぎて酔ってしまう者がでる、といった有様であった。
 - (3) このような問題が起きる原因は、神の家族としての交わりが壊れていることである。まず、コリント教会の信者たちと神との交わりが壊れている、そして、コリント教会の信者たちの間での交わりが壊れている。
2. 11 : 23～26・・・主から受け、信者たちに伝えられたことの再確認
 - (1) ここでパウロは、コリントの教会の信者たちに、主の晩餐（聖餐式）の本来の趣旨として、二つのことを再確認する。
 - (2) 23～25節 「わたしを覚えて」
 - ① イエスを覚えて・・・イエスがなされたこと、イエスが十字架でご自身の体を裂き、ご自身の血を注ぎ出してくださったことを思い出して
 - ② イエスの死の有様を、パンを裂き、ぶどう酒を注ぐことで思い出す
 - ③ 私たちを救うためにイエスがどのようなことを成し遂げてくださったのかを思い起こす

(3) 26節 「主が来られるまで、主の死を告げ知らせる」

- ① 信者たちはこの記念の食事を、主が再臨するまで続ける。
- ② 「主の死を告げ知らせる」とは、私たちを救うためにイエスがどのようなことを成し遂げてくださったのかを伝えていく、ということである。

(4) いわゆる「愛餐（アガペ・ミール）」（ユダ 12）との関係について

- ① 愛餐とは、信者たちの食事会である。あくまでも、それは共に食事をするのが目的であって、主の晩餐（聖餐式）とは別のものである。
- ② コリント教会は、主の晩餐と愛餐とをいっしょにしてしまっていて、失敗した。「イエスを覚える」ために集まるという出発点を見失ってしまった。「主が来られるまで、主の死を告げ知らせる」という集会の目的を忘れてしまった。

3. 11：27～30・・・主の晩餐に際して自分を吟味すべきこと

(1) 27節 「ふさわしくない仕方で」

- ① 新改訳の旧訳では「ふさわしくないままで」であった。この訳では信者自身が「ふわしい」か「ふさわしくない」、を問われているように誤解される。罪の性質をまだ内側に持っているかぎり、誰が自分はふわしいと言えるのか。誰もいない。
- ② 今の新改訳 2017 でも、良い訳とは言えない。パンの食べ方や主の杯を飲むときの飲み方が悪いのか、と誤解されるかもしれない。
- ③ 原文を直訳すると、「ふさわしくない状況において」である。この文脈では、コリント教会の二つの問題があるままで、である。分裂や分派が起き、また、食べ物や持ち物を分け与えることをせず、主の晩餐の本来の目的を忘れ、信者たちはめいめい我先に食べ、中にはぶどう酒を飲みすぎて酔ってしまう者も出るという状況を指している。

(2) 28～29節 コリント教会固有の問題に限らず、主の晩餐にふさわしくない状況をもたらす原因には、一般的には二つある。

- ① ひとつは、個人的な罪である。信者が自分の罪について気づいていながら、それを神の前に告白せず、そのままにしている罪があるとき、それは「ふさわしくない仕方で」となる。
- ② ふたつめは、教会の中における罪である。29節の「みからだをわきまえないで」とは、キリストの体である教会を吟味しないで、ということである。
- ③ 個人的な罪にせよ、教会の中の罪にせよ、ふさわしくない状況で主の晩餐を受けるなら、結果は、「さばき」（29節）を受けることになる

- (3) 30節 ここでの「さばき」とは、肉体的なものであって、靈的に救いを失うということではない。肉体的なさばきには程度がある。弱くなる、病気になる、そして死ぬ、である。
- ① 罪を神の前に告白せずにそのままにしておくと、神からのさばきの第一段階は、「弱くなる」である。私たちの体が、いろいろな問題に対処していただく十分な強さを発揮できなくなる。
 - ② 第二段階は、病気になる。
 - ③ それでも罪の問題をそのままにしておくと、第三段階に至る。
 - 病気が進み、死を迎えることになる。
 - 注意すべきことは、ここでパウロが教えているのは、病気の中でも、神のさばきにおける病気に限定してのことである。病気のすべてが神のさばきというわけではないし、病気の原因がすべて罪によるということでもない。

4. 11 : 31~34・・・主の晩餐に限らず、日ごろにおいて、自分を吟味すべきこと

日常的な自己吟味については、次の4つのことがポイントである。

- (1) 31節 もし、私たちが自分自身を吟味するなら、さばかれることはない。よって、信者は、自分の生活の中に罪があるかどうか、よく吟味すべきである。
- (2) 32節 もし、私たちがさばきを受けるなら、それは主からの訓練である。神は信者を懲らしめる＝父が子をしつけるために訓練する。私たち信者は、この世の他の人々とともに有罪となって火の池に行くようなことは、決してない。
- (3) 33節 私たち信者は、互いに尊敬し合い、持ち物を分け合うようにしよう。
- (4) 34節 主の晩餐は空腹を満たす場ではない。主の晩餐の趣旨として教えられたことを思い起こすこと。そして、主の晩餐にふさわしくない状況で主の晩餐を受けることのないように。そうすることで、神からの訓練を受けずに済む。

V. 結論 「交わり」と、この世の交際とは、どう違うのか

1. ギコイノニヤ

- (1) 「交わり」と訳されているが、本来の意味は、共同で何かを保持していること、である。日本語で「交わり」というと、単に交際するというような意味だけになる。コイノニヤは、パートナーシップとか、共同参加、といった意味を持つ。
- (2) よって、信者間でのコイノニヤと言えば、他の信者とのパートナーシップ、他の信者との共同参加、を意味する。

2. 霊的生活におけるコイノニヤ

(1) 信者と神との関係において

- ① 信者は、神と共同参加しているのは何か。自分の人生の生き方を通してメシアを証しすることである。
- ② この神とのコイノニヤの基盤は何か。救いである。
- ③ この神とのコイノニヤを保つ方法は何か。罪を神の前に告白することである。

(2) 信者間での関係において

- ① 信者は、他の信者と共同参加しているのは何か。福音の働きである。
 - 教義を学ぶ、それを教える
 - 礼拝を共にする
 - 主の晩餐を共にする
 - 与え合う、献金する
 - 福音伝道をする
- ② 信者間のコイノニヤの基盤は何か。神とのコイノニヤである。
- ③ 信者間のコイノニヤを保つ方法は何か。罪を犯した信者を赦し、和解することである。